

中村素堂

私もが知っているもので、鳴鶴先生が題字を書いておられる「書勢」という雑誌には、同流の有力な先生方や中国の名家の作品、また著名な拓本などが掲載され、相当学問的な記事も多く、半世紀以前の書道学が今日の学書研究に途を開いてくれた。

この系統の雑誌では「筆の友」というのが古く、大正の終わりころには、篆刻の大家、高畑翠石先生が責任者になっておられ、震災後果嶋が駒込の方の避難先にお訪ねしたことがあって、話が雑誌の経営におよび読者の連絡に苦勞している、と伺ったこともある。先生の歿後、引き続き田中信州先生が九十歳に近い今日まで、まだ平塚市のお宅で経営しておられるのには驚きとともに視界雑誌のひとつの金字塔的存在だと思っている。

この雑誌は文人系の雑誌で、篆刻あり南画あり漢詩ありで、あまり流派的にこだわらず時代の第一級の先生方が書作品を列べてクラブのような風雅の交歓をされていた。

今日の書壇の第一級の諸先生方はみなお若くて、以上の二誌には一介の競書生として投書し、何級とかいう段位をいただいているのを見る、あの先生も若い時分にはこのような作品を書いていたら、あの審査員の先生も何十年前前にはこんなまで努力勉強されたのかと判り、こりやこやうしてられないといった気持ちになることも屢々である。

他に吉田苞竹先生の「書壇」、松本芳翠先生の「書海」等、類似の雑誌は多々あったが、今日の盛況から見たらおそらく二十分の一もなかったかと思う。全く書道は隆盛になったかと思うと同時に、今日の書道界をここまで育成された大きな推進力は実にそのころの雑誌と競書生であった人々であられるのは感慨に堪えない。

木俣曲水というお医者さんで、文部省の教員免許の受験(むかし、文検といつた)に主眼をおいて指導された先生もあつたりしたが、また別の項でお話しをいたしましょう。他に「書苑」とか「書道及画道」とかもっと高度の研究誌もあり。少なかったが早くから多彩であつた。

この辺でちよつと話を換えて当時の書家先生の風態と申すのか風采と申すのか、思い出を少し書いてみましょう。昨今、上野の美術館と並んで上野の森美術館でも展覧会が開催されるので、何度か上野駅公園口駅に近い会場へも行きますが、もとは公園口駅などはなく、根岸の方へ抜ける幅が広くホコリっぽい馬車道があつて、石垣上には草木がかぶるように繁つていた。

上野駅も国電はあ美術館下が終点で、秋葉原、東京駅からの電車はまだ通じておらず、高架もなければ長いガード下の風景はもちらんなかつた。

駅を出ると、公園のはしに西郷さん銅像が見え、その後ろに彰義隊の記念塔があり、その右側にパノラマ館があつて楠公湊川の戦の場を一銭か二銭で見せてくれた。そのもうひとつ奥が日本美術協会で、当時としては東京、否、日本にただひとつの大きな列品館、この美術館があり、木造薄貳塗り平屋建てのものであつた。当時この美術協会の主催になる書画展が美術界の注目の的であつた。開催中は雨陛下の行幸啓もあつて、軍服警官の警衛のものものしい時もあつて、この展覧会の權威を感じさせられたものでした。

人が参観していても今のようには賑やかではなく、静かに三々五々列品室のガラス扉に顔をよせて若き日の尾上紫舟先生の仮名の貼り交ぜ屏風、その隣りに岡山高蔭先生の仮名屏風などあり、奥へゆくにしたがつて参考品の中国の宋・明・清の作品、古筆など少し出ていて、その一番奥の所に長い机を据えて緋の毛氈が敷いてあり、そこが審査の諸先生の席上揮毫台であつた。(つづく)